2022年度（2023年3月期）の概況

シャープ株式会社及び連結子会社　3月31日に終了した各連結会計年度

世界経済は、コロナ禍からの緩やかな持ち直しが続く一方、ウクライナ情勢などに起因してエネルギー・原材料価格が高騰、これに伴いインフレが進行し、各国で金融引き締めが実施される中、米国の銀行が破綻するなど金融不安が広がり、先行き不透明な状況となりました。

また、シャープの事業環境については、円安となったことや、ディスプレイ市況が悪化したことにより、非常に厳しいものとなりました。

こうした中、シャープは、「海外事業の強化」、「新規領域(新商品/サービス、新規市場、新規事業)の拡大」、「様々なリスクへの対応力強化」の3つの取り組みを推進しました。

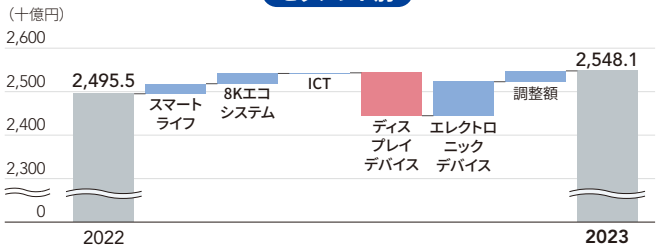
2022年度の売上高は、ディスプレイデバイスの売上が減少したものの、スマートライフ、8Kエコシステム、ICT、エレクトロニックデバイスが伸長し、売上高が2兆5,481億円(前年度比2.1%増)となりました。営業損益は、エレクトロニックデバイスが増加した一方、その他4セグメントが円安の影響やディスプレイ市況の悪化により大幅に減少し、257億円の損失(前年度は847億円の営業利益)となりました。経常損益は、営業損失となったことに加え、営業外損益が持分法による投資損失などの計上により47億円の損失となったことから、304億円の損失(前年度は1,149億円の経常利益)となりました。親会社株主に帰属する当期純損益は、ディスプレイデバイスを中心に2,205億円の減損損失を計上したことなどから、2,608億円の損失(前年度は739億円の親会社株主に帰属する当期純利益)となりました。

なお、年間配当につきましては、当期純損失の計上状況であることから、無配とさせていただきました。

- 世界経済は穏やかな持ち直しが続く一方、先行きは不透明な状況
- 円安やディスプレイ市況の悪化により、非常に厳しい事業環境となる
- 売上高は前年を上回るも、営業利益、経常利益は2015年度以来の赤字
- ディスプレイデバイス関連の減損損失などもあり、当期純利益は大幅な赤字
- 年間配当は当期純損失の計上状況であることから無配

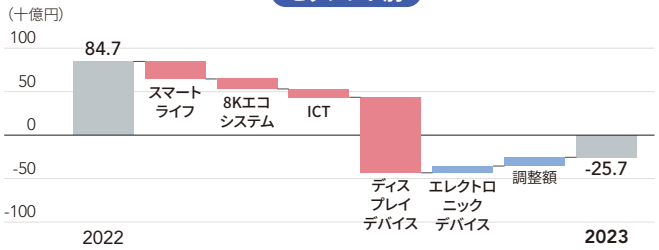
売上高 増減分析

セグメント別

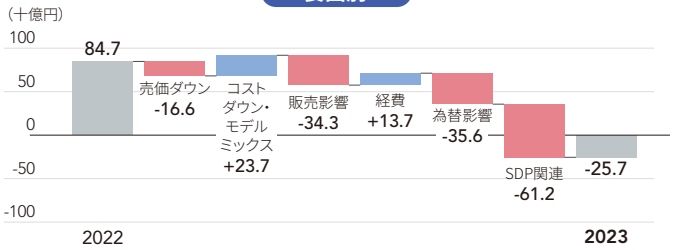


営業利益 増減分析

セグメント別



要因別



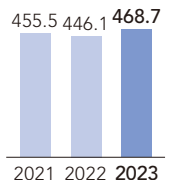
2022年度（2023年3月期）の概況

セグメント別売上高・セグメント利益（損失）

ブランド事業

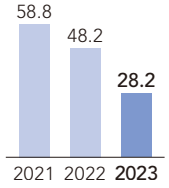
スマートライフ

■売上高（十億円）



白物家電事業は、調理家電が欧米を中心に伸長したほか、洗濯機がドラム洗を中心に好調で、増収となりました。エネルギーソリューション事業も、海外のEPCや国内住宅向けが伸長し、増収となりました。

■セグメント利益（十億円）

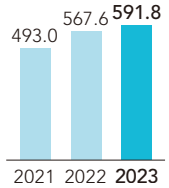


原材料価格が高騰したことや、円安の進展により国内の白物家電事業の収益が落ち込んだことなどから、減益となりました。

冷蔵庫、過熱水蒸気オーブン、電子レンジ、小型調理機器、エアコン、洗濯機、掃除機、空気清浄機、扇風機、除湿機、加湿器、電気暖房機器、プラズマクラスターイオン発生機、理美容機器、LED照明、電子辞書、電卓、電話機、ネットワーク制御ユニット、太陽電池、蓄電池等

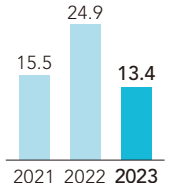
8Kエコシステム

■売上高（十億円）



ビジネスソリューション事業は、複合機やスマートオフィスなどが伸長し、増収となりました。テレビ事業は、市況低迷により、減収となりました。

■セグメント利益（十億円）

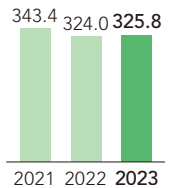


ビジネスソリューション事業が増益となった一方、減収となったテレビ事業は、一過性費用の発生などもあり、減益となりました。

テレビ、ブルーレイディスクレコーダー、オーディオ、デジタル複合機、インフォメーションディスプレイ、業務プロジェクター、POSシステム機器、FA機器、各種オプション・消耗品、オフィス関連ソリューション・サービス、各種ソフトウエア、マスク等

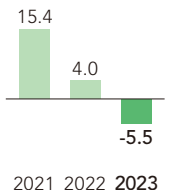
ICT

■売上高（十億円）



通信事業は、スマートフォンのハイエンドモデルが好調で、増収となりました。PC事業は、世界的な需要低迷により、減収となりました。

■セグメント利益（損失）（十億円）



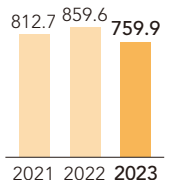
円安の影響が大きく、通期は赤字となりました。しかしながら、欧州の構造改革やモデルミックスの改善などの取り組みにより、下期は黒字となりました。

携帯電話機、パソコン、タブレット端末、ルーター等

デバイス事業

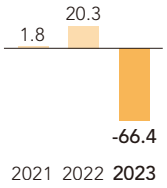
ディスプレイデバイス

■売上高（十億円）



車載向けパネルは大きく伸長しましたが、市況の低迷により、スマートフォン向けやPC向けのパネルが減少しました。

■セグメント利益（損失）（十億円）

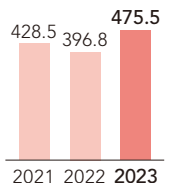


減収となったことや、大型ディスプレイ事業の影響などもあり、赤字となりました。

ディスプレイモジュール、車載カメラ等

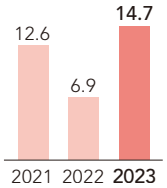
エレクトロニックデバイス

■売上高（十億円）



顧客の2022年モデル向けのデバイスが堅調に推移し、増収となりました。

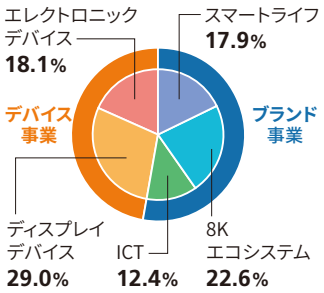
■セグメント利益（十億円）



売上の増加に伴い増益となりました。

カメラモジュール、センサモジュール、オプトセンサ、オプトデバイス、CMOSイメージセンサ、ウエハファウンドリ、半導体レーザー等

売上高



- 売上高は、セグメント間の内部売上高または振替高を含んでおり、円グラフの売上高構成比は、これを基に算出したものです。
- セグメント利益（損失）はセグメント間取引の調整前の金額です。
- 2022年3月31日に終了した連結会計年度より、「スマートライフ」「8Kエコシステム」及び「ICT」のセグメントの3区分を、「スマートライフ」「8Kエコシステム」「ICT」「ディスプレイデバイス」及び「エレクトロニックデバイス」の5区分に変更しています。これに伴い、2021年3月31日に終了した連結会計年度についても、変更後のセグメント区分に基づき表示しています。
- 2024年3月31日に終了する連結会計年度より、「スマートライフ」「8Kエコシステム」「ICT」「ディスプレイデバイス」及び「エレクトロニックデバイス」の5区分を、「スマートライフ&エナジー」「スマートオフィス」「ユニバーサルネットワーク」「ディスプレイデバイス」及び「エレクトロニックデバイス」の5区分に変更しています。（P.2～P.4をご参照ください。）